



森と表現が紡ぐ居場所



- 知的障がい者施設におけるエントランスのリノベーションと利用者とのワークショップ -

榎本雅好研究室 企画 浅井萌花 岸江琴羽



O1. 概要

社会福祉法人むそうとは、本部を愛知県半田市に構える150名以上の職員が在籍する社会福祉法人である。全国にグループホームや就労施設などを持ち、知的障がい者の幼少期から老年期までの暮らしに寄り添うことを理念としている。本研究では、むそう長久手のエントランスのリノベーションと利用者や地域の方とワークショップを行った。

O2. 背景

本研究の背景には、知的障がい者施設における環境が利用者や支援者の心理状態、さらには地域社会との関係性に及ぼす影響への課題意識がある。施設でのアルバイトを通じ、支援者の心理的負担の大きさを実感し、支援者が落ち着いて働く環境が利用者への良質な支援に繋がると感じた。また、むそう長久手が地域住民や障がい者、その家族にとって身近で頼られる場となるには、利用者・支援者・地域住民を繋ぐ空間作りが求められると考えたことが本研究の背景である。

O3. 目的

- エントランスと屋外環境を再構築し、施設の顔となる場を創出する。
- ・環境整備：安全性と平易性を高め、利用者と支援者の双方が快適な空間を目指す。
 - ・協働制作：ワークショップを通じ、利用者の感性を活かした魅力を空間に反映させる。
 - ・地域交流：イベントを通じて住民と接点を持ち、地域に開かれた「共に育つ場」を形成する。

O5. 現地調査

現地調査では、エントランスの階段およびスロープに老朽化が見られた。また、支援の場面における動線、靴箱や棚など日常的に使用される要素を中心に観察を行った。施設全体を通して、顔となる場所が不足しているという点が職員から挙げられており、施設の印象をつくるエントランスの必要性が示唆された。空間構成においては、駐車場からスロープ、エントランスまでをひとつの連続した体験とする計画への期待が寄せられている。さらに、施設に多数保管されている利用者の絵画作品を、魅力的な空間要素として積極的に取り込むべきだと考えた。

O4. 知的障がい者の特性理解

知的障がいに関する文献調査および観察を通して、空間設計上の重要な特性を整理した。自然に近い落ち着いた色は安心感を与え、文字よりイラストの方が理解しやすいことが確認された。また、複雑な動線は混乱を招くため、見通しが良く一貫性のある形態や動線計画が有効的である。これらの特性を深く理解することで、施設が利用者や支援者にどのように歩み寄るべきか、その本質的な課題を整理することができた。



06. エントランスのリノベーションの提案

■ 設計の軸

利用者の“居場所”にする



支援者の働きやすさ

- 描いてもらった絵を活用する。
→自分の絵がある=自分の居場所！

- 植物を育てる。
→自分が育てた花がある=自分の居場所！

- 一人で落ち着けるスペースを作る。

- 見通しを良くする。

■ コンセプト：「共棲の森」

森
一様な生き物がいきいきと過ごす森のようになって欲しい。
知的障がい者が自然カラーが落ち着くという特性がある。

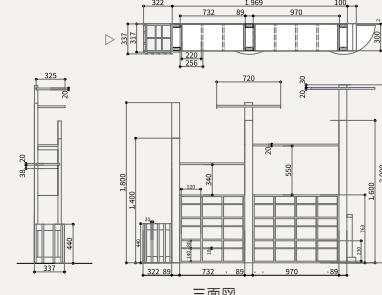
共棲
→利用者・支援者・地域住民が共に暮らすイメージ。

描いてもらった生き物の絵を飾りその生き物が住む森に！
→自分の絵で居場所を作る！

■ エントランス左側

大人の利用者や職員、来訪者が主に使用する靴箱を設置した。

棚には「共棲の森」を象徴する要素として、利用者が描いた生き物の作品を展示している。季節の移ろいに合わせて絵を入れ替えることで、訪れるたびに異なる森の表情を楽しむことができる。柱の上部には森をイメージした緑色の半円を取り付けた。



■ 隠れアニマル

エントランスの棚の一部には、普段は目立たない場所に利用者が描いた動物のイラストを配置した。

見つけた時ワクワク感を生み出すとともに、利用者同士や来訪者との会話のきっかけになることを意図している。分かりやすさを重視するだけでなく、発見する楽しさを取り入れることで、空間に主体的に関わる体験を促している。



■ 視覚的サイン <足跡>

玄関入口から靴箱、室内へと続く動線上に動物の足跡を配置した。

足跡をたどるという直感的な仕組みにすることで、混乱を防止している。次にどこへ行けばよいかが一目でわかり、利用者が迷わず安心して行動できる環境を整えた。

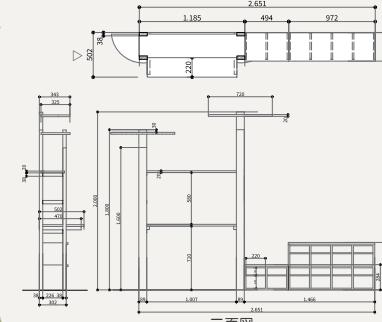


■ エントランス右側

子供たちが自分の力で靴を脱ぎ履きできるよう、靴箱の天板をベンチのように腰掛けられる高さで設計した。自分で座って準備ができるこの高さは、子供たちの「自分でできた」という自信を育むとともに、日常生活の中での自立を優しくサポートする仕掛けとなっている。

そのまま横には、支援者が一人で落ち着いて業務に向き合えるよう、カウンターと椅子を配置した。休憩や事務作業を行えるスペースを設けることで、職員の働きやすさにも寄り添った設計としている。

また、エントランス左側と同様に、棚には利用者が描いた生き物の絵を飾り、柱には森の木々をイメージした緑の半円を取り付けた。描いた絵が空間の一部になることで、利用者が「自分の絵がある=自分の居場所」という安心感を抱き、森の中で過ごしているような温かみを感じられる場所を目指している。



■ 視覚的サイン <くま・うさぎ>

靴箱の天板に、クマとうさぎの座っているイラストを配置した。これは利用者に“ここに座る”ということを示す役割をしている。言葉よりイラストのほうが理解しやすいという知的障がい者の特性に配慮したデザインである。

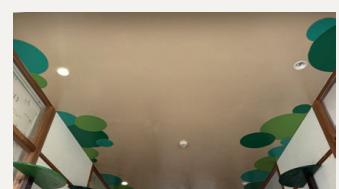
これらのサインを配置することで、利用者が自分で判断し、行動できる環境を構築し、心理的な安全性を高めるようにした。



■ 天井の塗装と装飾

視界に大きく入る天井を塗り替え、空間全体の明るさを調整した。

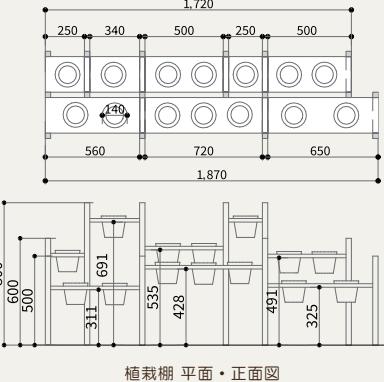
包み込まれるような安心感を与えるとともに、コンセプトである共棲の森を象徴する円形のカラーシートを配置。木漏れ日のような柔らかな装飾を施すことで、エントランスをより印象的に演出した。ただの通路ではなく、見上げることで心が和む空間となった。



07. 植栽棚の提案

(i) 概要

エントランスを彩る「森」のデザインとして、温かみのある木製の植栽棚を設置した。植物を自らの手で育て、その成長を見守ることで、施設を「自分の居場所」と感じてもらうことをを目指した。単に完成された場所ではなく、「自分でできた」という達成感を積み重ね、施設への愛着を育んでいく。収穫した花はフラワーアレンジメントとして飾り、みんなで「自分たちの場所」という温かな空気を分かち合う。本物の植物が持つ生命力によって、訪れる人の心に潤いを与える、エントランスの新しい顔となる。

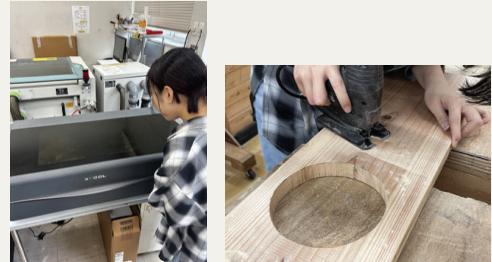


(ii) 施工

棚板はL字金具で強固に固定し、重い土や水にも耐える安全な設計とした。将来のメンテナンスも考慮した可変性のあるつくりで、下部には寄りかかっても大丈夫なように補強を加えている。

水やりなどの温気に備え、防腐剤とニスを丁寧に塗り重ねた。木を腐食から守るだけでなく、木の美しさを引き立てる柔らかな光沢を持たせている。

また、植物を覗き込んだときに金属パーツが目に入らないように金具の向きや位置を工夫して隠した。丈夫な構造という安心感と、木の温もりだけが伝わる優しいデザインを両立させている。



植栽棚 施工の様子

(iii) ワークショップ

新しい植栽棚を囲み、利用者と学生と一緒にパンジーを育てるワークショップを開いた。土に触れながら一緒に作業することで、自然と会話が弾み、穏やかな交流の時間が流れた。

この体験は「自分で育てる」という主体性を生み、今では日常的に「芽は出たかな?」と芽吹きを楽しみに水やりを続ける姿が見られる。

自分の手で命を育む実感が、「ここは自分の場所だ」という安心感や日々の喜びに繋がっている。みんなで育てた花が玄関を彩り、エントランスは単なる入り口から、みんなの笑顔と自信が集まる「居場所」へと進化している。



08. マルシェ

◇ 開催日：2025/12/21

場所：むそう長久手

時間：11時～15時

来場者数：25名

(i) 概要と広報活動

エントランスと植栽棚のリニューアルを記念し、地元住民を招いた冬マルシェを開催した。マルシェには地域店舗も出店した。

生き物の絵を描くワークショップを開催し、絵をエントランスに展示することでエントランスをみんなの描いた生き物が住む森へとなる。

開催にあたり、イベントのフライヤーを作成した。冬に行われることから冬らしいイメージと「共棲の森」のコンセプトに合わせ、温かみのあるイラストを用いて、多様な出店内容を分かりやすくレイアウトした。



マルシェのフライヤー

(ii) 実施内容と賑わい

マルシェ当日のエントランスは、いつもの静かな雰囲気とは変わり、様々な世代の人たちが集まるとても賑やかな場所になった。

絵を描くワークショップで、利用者や参加者が描いた色彩豊かな生き物は、エントランスに展示され、共棲の森の住民となった。また、パン屋の地元の出店もあり多様な人々が交差する賑わいの場を形成することができた。

この一日を通して、エントランスがただ通り過ぎるだけの場所から、みんなが自分を表現して交流できる場所に変わると強く実感した。

(iii) アンケートの実施と結果

マルシェの来場者を対象にアンケートを実施した。

結果、エントランスに対して「可愛くてほっこりする」「入りやすくなった」という声が多く寄せられ、安心感や地域交流に繋がっていることが分かった。植栽棚についても、「花が咲くのが楽しみ」「温もりを感じる」と好評であり、日常に変化を与える仕掛けとして期待されている。

また、参加した全員がイベントの継続を希望するという回答となった。フライヤーをきっかけに地域の方も多く訪れており、エントランスが交流の拠点として認知され始めていることを客観的に裏付ける結果となった。



マルシェの様子

09. 結果

・「ただの花壇、エントランス」から「温かい居場所」へ植栽棚とエントランスを修繕し、支援者が働きやすい空間をつくることができた。また、利用者の作品を活用することで、利用者がここを自分の居場所と感じられる施設となった。

・地域に開かれた交流拠点

リノベーションやマルシェの開催によって、むそう長久手が地域に開かれた交流拠点となった。

地域に住む知的障がいの者やその家族が、むそう長久手の存在を知ることで施設を頼るきっかけになると考える。



10. まとめ

本研究では、単に図面を引くだけでなく、自分の手で天井を塗り、床を直し、靴箱を組み立てるという、現場での制作と地域の方との交流をセットで行った。

さがみね冬マルシェのフライヤー作りから当日の運営、そしてみんなで玄関を飾る絵を描いた過程すべてが、新しくなったエントランスに命を吹き込む作業だったと感じている。完成した場所が、利用者や職員にとって毎日が楽しみになる安心できる居場所となり、地域の方にとってもふらっと立ち寄れる温かい場所として続いていくことを願う。